

平成 27 年度大台ヶ原自然再生推進委員会

議事概要

◆日時 平成 28 年 2 月 23 日 (火) 12:30 ～ 15:10

◆場所 ホテルリガーレ春日野 吉野の間

◆参加者

【委員長】

村上 興正 元京都大学理学研究科 講師

【委員】

井上 龍一 奈良教育大学附属小学校 教諭

川瀬 浩 (公財) 日本野鳥の会奈良支部 副支部長

木佐貫 博光 三重大学大学院生物資源学研究科 教授

高田 研一 高田森林緑地研究所 所長

高柳 敦 京都大学大学院農学研究科 講師

鳥居 春己 奈良教育大学自然環境教育センター 特任教授

松井 淳 奈良教育大学教育学部 教授

【オブザーバー】

近畿中国森林管理局

計画保全部 計画課 早瀬 善紀 企画官

保全課 古久保 順之 保護係長

箕面ふれあい推進センター 才本 隆司 所長

三重森林管理署 小畑 敏彦 地域林政調整官

奈良県農林部森林整備課鳥獣保護係 福富 竜弥 主事

三重県農林水産部獣害対策課 東川 恵美 主査

上北山村地域振興課 遠藤 学 主幹

川上村地域振興課 堀谷 敦 主事

近畿日本鉄道(株) 鉄道事業本部

大阪輸送統括部運輸部事業課 永田 圭示 課長

花本 美孝

(一財) 自然環境研究センター 千葉 かおり 主席研究員

安齊 友巳 主席研究員

荒木 良太 上席研究員

ソシオエンジニアリング(株) 西上 久遠 課長

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所

秀田 智彦	所長
榎本 和久	国立公園課長
遠藤 誠	野生生物課長
蒲池 紀之	自然再生企画官
川村 義治	生物多様性保全企画官
坂本 英利	自然環境整備課 課長補佐
鑪 雅哉	野生生物課 課長補佐
中山 良太	野生生物課 自然保護官
安生 浩太	国立公園課 係員
宮下 央章	野生生物課 係員
菅野 康祐	吉野自然保護官事務所 自然保護官
小川 遥	吉野自然保護官事務所 自然保護官補佐
樋口 高志	環境部 マネジャー
山内 昌之	環境部 マネジャー
樋口 香代	環境部 リーダー
城向 光弥	環境部

(株) 環境総合テクノス

#### ◆委員会の概要

大台ヶ原自然再生事業における平成 27 年度業務実施結果の報告および平成 28 年度業務実施計画を示し、今後の取り組みについて委員等に助言を頂いた。

#### ➤ 委員会の議題

- ① 大台ヶ原自然再生事業における平成 27 年度業務実施結果
- ② 大台ヶ原自然再生事業における平成 28 年度業務実施計画（案）
- ③ 平成 28 年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定（案）

#### ➤ 委員会の概要

##### (1) 議事について

議題の概要及び委員等からの主な助言等は下記のとおり。

##### ① 大台ヶ原自然再生事業における平成 27 年度業務実施結果

平成 27 年度の業務実施結果について報告し、助言を求めた。

#### 【森林生態系の保全・再生】

- 正木峠の稚樹保護柵について、柵内のミヤコザサが繁茂することから稚樹がササに覆われることへの対処が必要となる。稚樹保護柵の評価をするのであれば柵内外も含めたササの稈高の計測も必要ではないか。
- ササ地では坪刈りをしていないところで、トウヒの主軸が伸びることが各地で確認されているが、ササの稈高以上に主軸が伸びたものはニホンジカに採食されやすい。ササの坪刈りについては、今後の検討課題である。
- 稚樹保護柵の維持管理について、どのように進めるかを考えないといけない。

#### 【ニホンジカ個体群の保護管理】

- REM 法（ランダムエンカウンターモデル：個体識別を必要としない自動撮影を用いた生息密度推定方法）によるニホンジカの生息密度は、6～8 月に生息密度が最も高くなることがわかった。従来、糞粒法により推定している個体数密度は 10 月のものであるため、6～8 月よりも低い。個体数管理については生息密度が最高値となる 8 月を基準に考えないといけない。
- 自動撮影カメラを用いた生息密度調査結果は、成獣メスを対象として再度分析する必要がある。
- 捕獲個体のモニタリング調査結果の成獣メスの妊娠率の推移について、統計学的な有意差はなかったものの、近年低下傾向を示しており、平成 27 年の値は突出して低かった。妊娠率と栄養状態の二つの指標動向が一致しているため、今後の動向、特に平成 28 年度については注視する必要がある。
- 植生調査地点において、イノシシの撮影頻度がニホンジカより高いコドラートが存在した。イノシシによる植生への影響は大きいことが予想されるため、植生への影響程度と対策の必要性を今後検討する必要がある。

### 【生物多様性の保全・再生】

- 訪花昆虫について、種同定はできないが、夜間についてもインターバルカメラで訪花昆虫を確認することができる。昼間の調査と合わせて実施することを検討したらどうか。
- 大台ヶ原でミズラモグラの生息が確認されているのか確認して欲しい。生息しているのであれば、生物多様性の健全性を示すことができると思う。

### 【持続可能な利用の推進】

- 次世代を担う小中学生が大台ヶ原に行きたくなるようなガイドについても考えないといけない。
- 次世代を育てるための普及啓発活動として、小中学校でも研修会を実施したらどうか。
- 登録ガイドを利用する場合、西大台利用調整地区の事前レクチャーが不要になるなど、インセンティブが必要。
- ガイド登録せずにガイド活動する人の対応についての検討も必要。
- アクティブレンジャーの自然観察会の回数が1回では少ない。地元のボランティアやビジターセンター職員を活用する等して、土日だけ、小規模でも良いので常時自然観察会を行えるようにすべきである。

### 【大台ヶ原全体の変化に関する調査】

- 水質について、1983年に大台ヶ原の水生昆虫相のデータがあるので、直接的ではないが生物学的な比較はできる。水生生物相を比較するのは1つやり方であるので、実施方法を含めて今後検討するとよい。

#### ② 大台ヶ原自然再生事業における平成28年度業務実施計画（案）

平成28年度の業務実施計画（案）について報告し、助言を求めた。

### 【森林生態系の保全・再生】

- 稚樹保護柵について、維持管理を含めた評価が必要。

### 【ニホンジカ個体群の保護管理】

- 大台ヶ原ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画（第4期）を策定するにあたり、大台ヶ原ニホンジカ特定鳥獣保護管理計画（第3期）についての実施状況の見直しだけでなく、評価が必要となる。
- ニホンジカの目標生息密度をどのぐらいにするのが課題。現状では、根拠となるものがなく、決め手がない。今年度から実施している防鹿柵内外の植生の回復状況の比較等から健全な森林更新ができる状態がどのくらいかを検討する必要がある。
- ニホンジカによる植生被害が日本全国で生じている。生息密度を5頭/km<sup>2</sup>近くまで減少させた数少ない事例である大台ヶ原からの情報発信が足りないのではないかと。植生が回復しているか否かについての情報も発信すべきであり、それを判断するために、植生データをさらに追加していくべき。大台ヶ原ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画（第4期）を策定するにあたって、全国に大台ヶ原の成果を意識的に情報発信するべきである。
- ニホンジカについては、土地の選好性がある。また、植物については、回復が容易な種、難しい種の整理が必要で、共有できるデータを蓄積する必要がある。その上で、適正生息密度の検

討を行う必要がある。大台ヶ原ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画（第4期）は大まかな計画とし、具体的な取り組みについては、上記検討等を踏まえ、1年程度毎に策定する実施計画に記載して進めて行くのが望ましいだろう。

- 環境省と林野庁で情報交換を行い、捕獲したニホンジカの運搬など、協力体制をとれるようにする必要がある。

#### 【大台ヶ原全体の変化に関する調査】

- 水質調査に関連して土砂の流亡について調査を実施する必要があるのではないかと検討が必要。

#### ③ 平成28年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定（案）

平成28年度に実施する大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定案について報告し、助言を求めた。

- 持続可能な利用（ワイズユース）ワーキンググループについては、利用者が多い7、8月に携帯トイレの実験ができるようにもう少し早めた方がよい。
- 6月ぐらいの早い時期に、計画を検討するワーキンググループがあるとよい。
- 業務の実施計画の表に具体的な実施時期を書き込んだ方が検討しやすい。

#### ④ その他

- 会議資料について、事前配付したものに微細な修正を加えて会議当日に配付する場合は、資料全てを再配付するのではなく、事前に配付したものの修正分のみを配付するようにして、紙が無駄にならないようにしてほしい。また、資料そのものの量も減らすことを検討してほしい。

以上